SHOXX 217 1103
インタビュー：NAOKO TAKEICHI

GEMINI

馴染みのある場所から、開けた世界へ

【構築のための破壊】という景色を見事に描ききったフルアルバム『VANDALIZE』から約２年。彼らは通算４枚目のアルバムを完成させた。タイトルは『GEMINI』。双子・双子座という意味を持つというこのタイトルに彼らが込めた想いは、今、彼らが目指す、理想のバンド像であるという。
破壊の後に、広がった世界―。
それは、彼らの目に映し出されてきた景色と、今、Alice Nineというバンドに求められている景色の共存であった。
彼らが、今作『GEMINI』を作り上げていくまでの過程と、そこに納めた楽曲へのこだわりをロング・インタビューで探っていくことにしよう。

いよいよ完成したね、４枚目のアルバム『GEMINI』。

沙我：ですね。『VANDALIZE』から約２年かけて、いろいろと試行錯誤しながら、やっと自分たちなりに、Alice Nine らしさを形に出来るようになったんじゃないかなって思える１枚が作れたかなと。

沙我さまは、前号のパーソナル・インタビューで、“LUNA SEA だったら『MOTHER』と『STYLE』が、何か掴んで乗り越えた後のアルバムだったように思うし、L’Arc～en～Ciel だったら、『True』『Heart』だったと思う。両方とも、偶然かもしれないけど、４・５枚目のアルバムだから、自分たち Alice Nine も、この『GEMINI』が、何か掴んで乗り越えた後のアルバムになるんじゃないかと思う”って言っていたよね。

沙我：ですね。偶然なのかもしれないけど、バンドって、いろいろと試行錯誤しながら、本当の自分たちらしさを見つけていくんじゃないかなって思うんですよ。自分たちが目指すバンドの音と、ファンの子たちが求めている音がなんであるのか？正直、まだまだ全てを知り尽くした訳ではないし、今回のアルバムだって、まだまだ試行錯誤の中にあると思うんですけど、でも、『GEMINI』では、今の段階での、ひとつの答えが出せた気がしてるというか。

激しいモノもポップなモノも、その両方ともが Alice Nine なんだってことを、詰め込んだ１枚になったって言っていたけど、まさに、その言葉どおりのモノを感じたアルバムだったよ。今回のアルバムを作る上で、立てたコンセプトやテーマはあったりしたの？

将：最初からテーマを立てて、そこに向かっていったというより、デモが出揃った時点で、沙我くんとのやりとりで、“地球から月に行くような、開けた感じ”にしようかっていう、ひとつのテーマ的なモノが上がってきたんです。つまり、“馴染みのある Alice Nine の世界から、ディープな Alice Nine の世界へ、みなさんをお連れする”っていう１枚にしたいねって。あとは、自分たちが目指すバンドの音と、ファンの子たちが求めている音っていうところにも繋がってる部分で、この１枚のアルバムの中で、Alice Nine というバンドの二面性が見せていけたらいいなって思ったんです。

『GEMINI』っていうのは、そこから来てます。GEMINI って双子座とか、双子っていう意味があるんですけど、そこから、表裏一体的なモノにも繋がればいいなと

思って。根底は同じなんだけど、相反するモノを表現したいと思って、考えた結果に辿り着いた言葉が、GEMINIだったんです。

なるほどね。それは、将くんと沙我さま２人のやりとりの中で生まれたの？

将：ですね。５人で話し合ってという感じではなかったですね。

沙我：とは言っても、俺と将くんとの勝手な意見という訳ではなく、歌詞を書いていく上では、やっぱりテーマ的なモノって必要になってくるんで、そこで必要なことを話合ったって感じだったんですけど、ぶっちゃけ、俺も自分自身が作曲する人間として、あんまり、楽曲作りの上でテーマって必要ないんですよ。時には（タイアップ的なことがある場合など）、テーマに基づいて作らなくちゃいけないときもあるけど、曲を作るときって、逆に、そういうのってあんまり必要じゃないんですよ。作曲者的に一番に考えるところは、“とにかく、いい曲を作ろう”っていうとこだったりするんで。でも、やっぱり、歌詞を担うヴォーカリストにとっては、歌詞やタイトルを作っていく上で、テーマってすごく大事なモノでもありますからね。

ヒロト：そうだね。でも、このアルバムに至までのシングルの制作段階から、“馴染みのある場所から開けた世界へ”っていう感じのテーマは、なんとなく５人の中に生まれてはいたんですよね。

前アルバム『VANDALIZE』から今作までの間には、「華」「閃光」「Stargazer:」っていう３枚のシングルが存在する訳だけど、その流れの中で、既に、“馴染みのある場所から開けた世界へ”っていうテーマは生まれていたと。

ヒロト：そう。カッチリとしたテーマとして置いてた訳じゃないけど、“そういう方向性でいきたいね”っていう話は５人でしてたような気がする。最初の話にも出て来てたように、『VANDALIZE』で、タイトルどおり、ひとつ何かを壊して、そこで掴んだモノを、次にどう活かしていくかっていう話をしてたときに、“シングルでは、みんなが求めてくれてるような、いわゆるAlice Nineらしい、馴染みのある楽曲で攻めていって、アルバムでは、逆にアーティスト性の高い、突き詰めた作品を作っていこう”っていう、大きな意味でのテーマみたいなのは、作曲者であるウチの中にもありましたね。だから、自然とそういう思い

の詰まった曲作りになってはいたと思う。

なるほどね。今のヒロトの言葉は、このアルバムが見える一言だったと思うし、ここにまで至までの言葉にしてくれた気がするな。まさに、「閃光」「Stargazer:」「蜃気楼」って、このアルバムの中で、すごくシングルっぽさを光らせてるし。でも、かと言って浮いてる訳ではなく、すごく調和してるし。不思議だよね、そこが。でも、今回、「華」が入っていないのはどうしてなの？

沙我：「華」は、当時は新しいところへ一歩踏み出せたと思ってたんですでこ、でも、今振り返ると、『VANDALIZE』の一部だったなって思うんですよね。当時「華」を作り上げたときは、“すごいキャッチーな曲が出来た！”と思ってたんですけど、今になって振り返ったら、思いきりが足りなかったというか、まだまだその先の一歩を踏み出せずにいた感じがするんですよね。だから、今回のアルバムの色ではないかなと思って、今回「華」は入れずに、「Stargazer:」のカップリングだった「蜃気楼」を入れることにしたんですよ。

「蜃気楼」は虎の作曲曲だけど、虎っぽくない１曲でもあったよね。

虎：ですね。「蜃気楼」は、岡野ハジメさんというプロデューサーを迎えての楽曲作りってこともあって、大きく変化した１曲ではありましたね。聴いてて心地よいメロディーを、すごく意識した１曲でもありましたからね。

個人的には、「Stargazer:」終わりから、具体的にアルバムに向かって動き出した感はありましたね。ツアー中だったこともあって、いろいろと両立しながらスタートしたアルバム制作だったんで、最初は正直、なかなかアルバムに専念出来る感じではなかったんですけど、でも、そういう環境やライヴ感もアルバムには意識しなくても出てると思うし、それがそのときの自分たちだし、本当に今のAlice Nineが詰め込めたアルバムになったんじゃないかなと思いますね。

Nao：今回のアルバムは、岡野さんが居てくれたことで、大きく変われた気がする。精神的に安心感も大きかったし。自分たちだけでやっていたときよりも、より、作品に広がりを持たせられるような気もしていたのもあって、自分たちの曲ながら、仕上がりが自分たち的にも楽しみで仕方なかったっていうか。デモ

の段階から、個人的に好みの曲はあれど、どの曲がアルバム曲として選ばれても、文句ない曲が出揃ってたなって思いますね。それだけ、メンバーの想いが同じ方向を向いてたのかなって。

いままでのアルバム制作では、選曲会のとき、収録曲数ギリギリの曲数しかなかったけど、今回は、たくさんの曲が出揃ってたって言ってたもんね。

Nao：そうなんですよ。今回は、具体的に何曲あったかしっかり覚えてないけど、かなりの曲数ありましたからね。

沙我：かなり意欲的でしたね。

ヒロト：個人的には、アルバム曲という意識ではなく、シングルの時期とかぶってたのもあって、その流れで曲作りをしてたって感じだったけど、とにかく、さっき言ったみたいなことを、常に意識しながら曲作りをしてましたからね。今回のアルバムは、沙我くんがすごく頑張ってくれてたのもあって、僕は３曲くらいしか作ってないんだけど、一番変化があったなって感じたのは、「Stargazer:」のときだったかな。「華」を作ったあたりから、次のアルバムに向けてのいろいろな挑戦はあったから、今回のアルバムで一気に変化したっていう感覚はないかな。

なるほど。アルバムについて、詳しく聞いていきたいんだけど。１曲目の「I.」は、SE ではないけど、まさしく、このアルバムのオープニング SE のような雰囲気を宿した１曲だよね。

沙我：この曲は最初入る予定じゃなかったんですけど、周りの後押しにより、入ることになったんです。

ヒロト：ツアー中は、この曲じゃない別の曲をプリプロまで進めてましたからね。

沙我：「I.」が入ることになったんで、その曲は、今回は入らなかったんですけど、曲的には、その別曲も、いままでにやったことのない感じのサウンドだったし、曲調だったんですけど、「I.」の方が、このアルバムの中に入ったとき、しっくりくる感じだったんです。「I.」は、俺が、高校生の頃に作った曲なんですよ。ちゃんとデータで残しておいた訳ではなかったんですけど、脳内にずっと残っていた曲で、いつか形にしたいなって思ってたんですよ。

そうなの？それは意外。むしろ、今回のアルバムは、この曲が生まれたことで、広がっていった１枚だったんじゃないか？って思ったくらいだったから。それ

に、「I.」は、「Stargazer:」や「蜃気楼」とも、４曲目の「4U」とも、すごく深く繋がっている空気感も感じたし。

沙我：たしかに、結果的にそう感じさせるモノになりましたね。「I.」は、ストリングスがメインの楽曲を作りたくて作った１曲だったんです。なので、バンドサウンドとかは、まったく意識してないと言ってもいいですね。

虎：「I.」に始まって、頭の方は、すごく聴きやすい楽曲でまとめられてる気がするんですよね。でも、中盤以降がちょっとマニアックになっていく感じでまとめられてますね。

将：歌詞的な繋がりの部分で言うと、俺の中で、「I.」と「4U」は繋がってますからね。自分のことと、貴方のこと。そんな繋がりも、今回のアルバムの流れの中では、面白い位置に置かれてるんじゃないかなと思いますね。ちなみに、ラスト曲の「birth in the death」とかは、１曲のなかで、アルバムのテーマでもあった二面性を表現した歌詞だったりもするんですけど、そこは、今回のアルバムのテーマがあったからこそ生まれてきた歌詞だと思うし。今回、歌詞的には、いろいろと遊べてる気がしますね。

なるほど。アルバムのオープニングをイメージされる「I.」から、どう流れていうのかな？という期待感の中“そうくるんだ！”的な驚きもあった、ヘヴィナンバー「RUMWOLF」。これはヒロトの曲ですが。

ヒロト：この曲は、沙我くんとの合作なんですけど、曲調の感じ的には、『VANDALIZE』の 7曲目に収録されてた、「www.」に似た雰囲気かなと。この曲は、最初、“アルバムの中に１曲、馬鹿な曲が欲しいよね”っていう話になったんですよ。「Stargazer:」で、岡野さんと一緒に音作りをするようになって、しょっと古いロックンロールをやってみようかっていう話になったことがあって、古いロックンロールを聴いたりしてたんです。そのとき、自分的にも、ちょうど、シンプルなロックンロールリフの曲がやりたいなっていうときだったんで、まず、そこの部分を素直に形にしてみたんです。それを元に、沙我くんが１曲の楽曲にまとめてくれたっていう流れでしたね。

沙我：あ、これ、ヒロトファンに恨まれると嫌なんで、一応弁解しといていいです（笑）？俺が、ヒロトが持ってきたリフを奪って１曲にまとめたっていうんじゃなく、今回のアルバムの中に、どう

してもヒロト曲を入れたかったんで、“このリフを１曲の形にして入れよう！”って、斡旋したんですよ！だから、ヒロトのリフを奪って俺が１曲に仕上げたんじゃなく、俺が、ヒロトのリフを救ったっていう形だったんで、ヒロトファンのみなさん、俺の恨まないように（笑）！

虎：あはははは。

ヒロト：そんな文句を言うヒロトファンは居ないと信じたい（笑）！

沙我：だから、この曲で俺が上手に行ったときは、“ふんっ”ってしないで、むしろ、“沙我さま、ありがとう！”っていう優しい目であたたかく迎えて欲しいなと。ヒロトファンのみなさま（笑）。

間奏ではベース、結構フィーチャーしてるけどね（笑）。

虎：弁解しておきながら、“結局目立ってるんじゃん、ベース！”みたいな（笑）。

沙我：一瞬ですから！せっかく弁解したのに台無しじゃないですか（笑）！

ヒロト：大丈夫、ヒロトファンはそんなこと気にしないから（笑）！

間奏にホーンを入れてたりするよね。ブラスの音って強いから、ブラス部分が際立つことが多いけど、この曲の不思議なところは、そこまでブラスを立たせないで加えているところもポイントだよね。

沙我：ですね。ブラスを、こういうヘヴィなロックに加えていくのって、結構勇気がいるんですけど、いい意味で、キャッチーにもポップにもなったし、ありきたりな感じにならなくて良かったなって、自分たち的にも思いましたね。最初は、もっとオルタナティブだったんですよ。

ブラスを入れようというのは、沙我さまの意見だったの？

沙我：最初に、岡野さんが“入れてみるのも面白いと思うよ”っていうアイディアをくれたんですよ。で、“どう？”って聞かれたんで、やってみるのも面白そうだなって思ったんで、挑戦してみたんですよ。そしたら、いい化学変化が生まれたというか。そういうとき、やっぱり、自分たちだけでやってたら、出て来ない斬新な意見があると、冒険出来るなって思うんですよね。

Nao：たしかに。でも、この頭の流れ、いい感じですよね。「I.」、「RUMWOLF」、「Stargazer:」、「4U」、「蜃気楼」っていう流れね。でもね、俺、近い将来、絶対に、逆から再生すると思いますね（笑）。

どうして？

Nao：いや、なんとなくなんですけどね（笑）、流れに飽きたら、自分的な流れを作って聴いてもらっても楽しいアルバムなんじゃないかなって思うんですよ。そこが、今回のアルバムの俺のオススメな部分ですね。

沙我：岡野さんに、曲順をナメるなって言われましたからね（笑）。

たかが曲順、されど曲順ってこと？

沙我：そうですそうです！聴き手が後から自分の好みで並び替えて聴いてくれるのは、すごくいいことだけど、提示する側が１枚のアルバムとして曲を並べるときは、とにかく何度も聴き返して、慎重に並べろって言われましたからね。

たしかに。曲の並びによって、すごく聞こえ方が変わってくるからね。

将：そこは大きいと思いますね。今回、特にそこまでヘヴィーな印象のハードな楽曲がない中で、この曲と、「KING&QUEEN」は、サービス曲というか、立ってる２曲なんじゃないかなと。「RUMWOLF」は、直訳すると、“羊狼”ですが。この歌詞と「KING&QUEEN」は、すごく遊べて書けた歌詞でしたからね。ここら辺の曲を、他の楽曲たちの中に、どう置いていくかっていうのは、考えた部分でもありましたね。

沙我：今回、あまりにも激しい曲が無さ過ぎるねってことになり、まさに、「RUMWOLF」と「KING&QUEEN」は、最後に付け足す感じで作りましたからね。

「RUMWOLF」と「KING&QUEEN」の２曲が最初なかったとなると、相当柔らかい印象の１枚だったんだね。

将：そう。始めはね。

ぼんやりした感じというか。まさに、UK系色の濃い１枚だったというか。

沙我：ですね。なんか、そんな気分だったんです。長くバンドをやってくると、激しい音楽じゃないところに惹かれる時期ってあると思うんですよ。そんな時期もちょうど重なったのかなって思ってて。でも、またやりたくなるんですよ、頭振りたくなるような激しいロックも。だから、ファンのみんなには、悲しまないでほしいですけどね。激しい音楽をやらなくなる訳じゃないんで（笑）。

将：頭振れる音楽って、わかりやすい部分が多いですからね。ノリとかが。

頭振れない音楽って、どう聴いたたいいのか解らないっていうかね。優しい音楽が、ぬるく聴こえてしまっていた時期っていうのは、絶対にある。でも、

だんだん、精神的にノレるというか、入れる音楽を心地よく想う年齢がきて。

Nao：すごく解る（笑）。

沙我：音楽はジャンルで聴くモノじゃないんだっていうのを、年齢を重ねると知ることになるんですよね。

そうだね。このアルバムは、そういう意味で、すごく音楽の楽しみ方を教えてくれてるうように１枚な気がするよ。

ヒロト：そう感じてもあえたら嬉しいな。

沙我：でも、やっぱ、ウチら的にも、ライヴでは頭振りたいんで（笑）、ここは激しいロックも入れとかないとねってことで、入れることにしたんです、「RUMWOLF」と「KING&QUEEN」。こういう曲たちは、ファンの子は絶対好きだと思いますからね。

将：そういう意味で、この２曲は、サービス曲なんです（笑）。ファン的には、「閃光」がすごい人気だったりするんで。

そうなんだ！「閃光」って、ある意味、すごく昔のメタルの臭いがする楽曲だったから、個人的には最高に好みな楽曲だったんだけど、今の若い子たちが聴いて、どう想うのかな？って、すごく興味があったというか。

虎：すごい好きみたいですよ、ファンの子たちは。ウチら的にも、どういう反応が返ってくるのか楽しみな１曲だったんですけど、“あ、なるほど、こういうの好きなんだ！”って思いましたからね。

将：ちなみに、「閃光」は、８年来の付き合いになる、ナイトメアのRUKAさんが、“「閃光」、いい曲じゃん！”って初めて褒めてくれた１曲でもありましたからね（笑）！

Nao：へぇ～そうなんだ！それ初耳なんだけど！でも、それ嬉しいね！

初めてって（笑）

将：（笑）。でも、そのとき、“どうして最後に、もう一回サビが来ないのか、沙我くんに聞きたい”って言ってた（笑）。

虎：あははは。RUKAさんだったら、最後にもう一回サビを持ってくるっていうことなんだろうね（笑）。

Nao：たしかに（笑）。だろうね。で、その質問に対してどうなの？

沙我：なんでだろ（笑）？そこで完結させちゃったという（笑）。あ、ちなみに、今、褒められたから言う訳じゃないですけど、ナイトメアの新曲の「D線上のトラジェディ」、すごいいい曲だなって思ってらんですよ！って、この原稿に書いておいて下さい（笑）！

あ。ちなみに、「D線上のトラジェティ」は、咲人の曲なのね。

沙我：あ……。

一同：（爆笑）。

Nao：ま、でも、ナイトメアの曲であることには変わりないからね（笑）。

そうだね。どんまい（笑）！

沙我：あ（笑）。でも、俺、ナイトメアの「D線上のトラジェディ」を聴いたときに、正直、Alice Nineの「閃光」を通じるモノがあると思ったんですよ。なんていうのかな、いい意味で古いロックを感じたというか。ドラマティックでありながら、すごくロックしてる感じの世界観が、近いなって思ったんです。

解る。同じ温度を放ってる曲だよね。でもね、今回のアルバムを不思議に思ったのは、UKっぽいぼんやりとした美しい世界観もありつつ、すごく古いロックを感じる1枚だったこと。

沙我：たしかに、今回のアルバムって、古めな音かも（笑）。今風な感じがないっていうか。ナイトメアに続き、いろんなバンドの名前を上げて話しちゃいますけど（笑）、ムックの『カルマ』とは対極なアルバムなのかも。ムックの『カルマ』って、すごく今っぽいアルバムだと思うんですよ。もちろん、そこがすごいカッコイイなと思ったんです。今っぽい音を取り入れながら、昔からのムックらしさを失ってないとこが、すごいなって思ったというか。それって、実際にやろうと思いますからね。でも、それをちゃんと形に出来てて、すごいなって思ったんです。そこに比べて、ウチらの『GEMINI』って、新しい、今っぽい音を取り入れた挑戦じゃなく、古くから存在してるモノを、自分たちらしく表現してる感じというか。もちろん、そこがバンドにとっては大きなチャレンジな訳ですけど。

そうだね。単なる焼き直しってことにはなっていない、Alice Nineの個性を感じるモノだから、そこがすごく不思議なんだよね。

ヒロト：たしかに、そういう意味では、『VANDALIZE』の方が、新しいジャンルへの挑戦があったというか、やっぱり壊した感はあったというか。

「KING&QUEEN」なんかも、オールドロックな臭いがすると思うからね。この曲は虎の作曲曲だけど、虎的には、どういう景色を思い浮かべて、この曲を作っていったの？

虎：この曲は、まさに、沙我くんから、“激しい曲が欲しいから、なんか、こ

のアルバムの中に入れることを意識した上で、激しい曲作ってほしい”って言われたんですよ。それで、“んじゃ、こんなんどう？”的な感じ作ってみたんですよ。

“キンキンキーン”って音階を上がっていくような、高いキーの曲始まりも、ズクズク系のギターも、ベケベケ系のベースも、往年のロックを感じたというか。

虎：ズクズク系のギター曲もね、王道と言えば王道じゃないですか。だから、どうありふれた曲にしないように、新しく生み出していくかっていうのを、すごく考えたとこでしたね。いままでも、アルバムの中に１曲は、ズクズク系の曲、入れてきましたしね。今回のこの曲は、このアルバムの中に入ることを前提に書いた、ズクズク系の曲だったんで、そこの新しさは感じてもらえるんじゃないかなと思いますね。

Nao：ちなみに、ギターがズクズクしてたんで、ドラムもドコドコ攻めてみました。アルバムの中でも、すごくいいフックになってる曲だと思うので、この曲に行き着くのを、楽しみにしててほしいですね。

将：この曲は、歌メロのキーも相当高いですからね。ライヴでやるときは、結構大変そうだなって思いますもん。歌詞は、曲に対して、キャラクター付けした感じでしたね。曲のキャラクターをより伝えるために、ラッピングの作業をしたというか。すごく自由に書けた歌詞でした。メッセージ性を大事にしたというより、いろんな受け取り方が出来るような、意味がないのを楽しんでいるような歌詞なので、そこを楽曲を一緒に楽しんでもらえたらなと思いますね。

なるほど。そして、ちょっと異色だと思ったのは、９曲目の「風凛」。これは、和な感じというか。

将：俺、この曲を聴いて、安全地帯だと思ったんですよ。そしたら、沙我くんに、ジェームス・ブラウンだって言われたんです。

へ！？ジェームス・ブラウン！？この曲が？？

沙我：そう（笑）。いやいや（笑）、曲自体は、和って感じてもらったように、ぶっちゃけ、めちゃめちゃ演歌なんですよ、この曲。そのとき、“あ、そういうことか！”って気付いたんですよ。なるほど、演歌とジェームス・ブラウンって同じことなんだって。

それは、ソウル的な面で？

沙我：そうですそうです。

なるほど。たしかに。演歌は日本のソウルだからね（笑）！

沙我：そう。発見だったんですよ、自分の中で。ソウルな世界を日本人がやったら、演歌になるんだっていう。

ヒロト：むしろ、和っぽいって言葉を濁すより、演歌っぽいって言わないと伝わらないのかなって思う。

そうだね。正直、聴いたとき、“うわっ。演歌っぽ！”って思ったんだけど、今、こうしてインタビューで話すときは、“演歌っぽいね”って言っちゃうのを躊躇した自分が居たんだよね。

沙我：その感覚は解りますけどね、なんか、“ソウル＝カッコイイ”のに、“演歌＝ダサイ”みたいな感じというか。正直、自分も最初は、演歌っていうジャンルに抵抗があった人間なんですけど、でも、演歌というジャンルを調べていくと、やっぱりそこは、ジェームス・ブラウンなんですよ（笑）。だから、今はこの曲を、演歌っぽいって表現してもらっても、まったく抵抗がないですね。

将：むしろ、“演歌をこんなにロックに聴かせられるAlice Nineってカッコ良くない？”って感じだよね（笑）。

沙我：そうそう。やっぱ、日本のロックって、どこか演歌なところありますからね。メロとか空気感とか。本当にソウルな部分なんだと思うんですよ。

虎：演歌とは！【日本の大衆音楽のジャンルの１つであり、日本人独特の感覚や、情念に基づく娯楽的な歌曲の分類とされている。演歌が用いる音階の多くは、日本古来の民謡等で歌われてきた音階を平均律に置き換えた五音音階（ペンタトニック・スケール）が用いられることが多い。すなわち、西洋音楽の７音階から第４音と第７音を外し、第５音と第６音をそれぞれ第４音と第５音にする、五音音階を使用することから、４と７を抜くヨナ抜き音階と呼ばれている】らしいよ。

Nao：調べたの（笑）？

虎：そう。今ね、Wikipediaで（笑）。

そうなんだ！でも、まさに、ペンタトニック・スケールといえば、ブルースで用いられる音階でもあるからね。

沙我：ね。すごいでしょ。なんか感動しません？ブルースっていうと、すごいカッコイイって思うんだけど、演歌っていうと抵抗があったのはどうしてだろう？って。演歌はブルースなんだって思ったら、すごい納得しちゃって。でも、なん

か、まんま演歌な感じはやっぱ嫌だったというか。そこには魅力を感じないんで、ちゃんと演歌をロックにしたかったんですよね。

将：そこは沙我くんにすごく言われましたね。演歌がやりたい訳じゃないって。あくまでも、そのソウル感がほしいんだって。なので、そこはすごく気をつけましたね。岡野さんが、この曲にはキーボードがあった方がいいっていうので、そういうフレーズを得意とするキーボーティストの人を連れて来てくれたんですけど、その人にも、演歌にはしたくないんだっていうことを、すごく話をして、完成型に導いていったんです。

ヒロト：ちょうど僕、鍵盤を入れてるとき立ち合ってたんですけど、そこはすごい気をつけてもらいましたからね。本当にスレスレのラインだと思うんで。

そうだね。

将：今、すごく流行ってる、アーティストは歌う日本のR&Bって呼ばれてるジャンルって、すごく演歌だと思いますからね、根本は。そこを、いかに自分たちらしく化けさせるかっていうところだと思うんですよね。

沙我：俺、THE YELLOW MONKEYがすごく好きなんですけど、イエモンの曲って、すっごいロックだと思うんですよ。でも、やっぱり根本的な部分に、歌謡曲と演歌を感じるんですよね。そこがあるからこそ、こんなにも惹かれるのかなって、改めて思いましたからね、ただ、洋楽のロックを真似てるだけじゃない、自分たちのロックを築き上げてるところに、魅力を感じてた訳で。今回、この曲を作って、演歌とジェームス・ブラウンが重なったことで。そこは自分にとって、すごく大きな発見でしたね。

ヒロト：それ、すごい解る。この曲って、最初のイメージとレコーディングを進めていく段階で、すごく景色が変化してった感じでしたね。リズムを録った段階で、一気に景色が変わった感じがしましたからね。ベースも、見たことのないようなベースだったし。なんか、ウッドベースを無理矢理エレキベースにした感じのベースで。ナイロンの弦だったよね。

沙我：そう！めちゃめちゃ変なベースでしたよ。指を置けないというか、固定出来ないんですよ。とにかく、衝撃でしたね。この曲には、このベースの方がいいんじゃないかって、岡野さんが持ってきてくれたんですよ。

ヒロト：でも、そのベースでリズム隊が録った音を聴いて、一気にイメージが広がりましたからね。そこから、すごく面白い曲だなって思いましたね。正直、沙我くんから曲の原曲を聴かせてもらったとき、不安だったんですよ。“ん～、どうなるのかな？”みたいな。Alice Nineの楽曲としては、馴染みのない感じだったんで、若干の迷いがあったというか。見えなかったんですよ、自分の中で、どういう完成型になるのか。でも、そのベースの音が入ったことで、すごい楽しくなって。こんなに楽しかったのは久々な感覚でしたね。

なるほどね。

沙我：でも、実はこの曲、「閃光」の後のシングルの選曲会で、一回持ってってるんですよ。でも、ボツになったんです。でも、今回浮上したんです。

ヒロト：だからこそ、アルバムの中では、「閃光」の次に来てるんです（笑）！

そうなの！？

ヒロト：はい（笑）。

Nao：俺的には、その最初の選曲会のときに聴いたときから、気になってたし、やりたいなって思った曲だったんです。でも、周りも結構最初は躊躇してて。でも、実際やりことになって、ドラムをいれていくとき、いろいろと勉強しましたね。ブルースだって言われて、ブルースのドラムを教えてもらったんです。普段はキックを入れるところを、キックを入れずに我慢するんです。なるほど、そうするとこうなるんだ！的な発見がたくさんあった１曲でしたね。本当にチャレンジでしたね。しごかれた１曲でしたね。

歌詞はどんなことを意識して書いたの？

将：映画みたいな歌詞にしたいなと思って書き始めた歌詞でしたね。最初にクライマックスシーンを持って来る感じで。だんだん過去に戻っていくっていう。

回想的なね。

将：そうですね。その過去があるからこそ、これからがあるっていう流れで書きましたね。そういう書き方は普段あんまりしないんで、すごく面白かったです。

そして。その「風凛」に続くアルバムタイトル曲でもある「GEMINI-0」「GEMINI-I」「GEMINI-Ⅱ」という大作へと流れていく訳ですが。

沙我：はい。この曲を作ってた制作期間中のある日、岡野さんから夜中の３時とかに電話あって、“ここ、どうしたらいいと思う？こうしたらどうかな？そしたらもっと良くなると思うんだけど”

って（笑）。え？さすがに寝てたんですけど……（苦笑）、的なエピソードもありましたけど（笑）、それくらい岡野さんも夢中になって向き合ってくれてたんだと思うんですよね。それくらい大作です。

なんと言っても１２分だからね……。みるからに大作。これは最初から、こういう曲を作ろうと試みたの？

沙我：いや。正直、“なっちゃった……”って感じでしたね（笑）。誰もこんな、買ってまで苦労はしたくなかったですよ（笑）。作っていくうちに止まんなくなっちゃって（苦笑）。自分的にも、どうしてこんな曲作っちゃったのか解らないっていう（笑）。終わり方はみえていたんですけど、その終わりに向かうまでに、ここまでの時間がかってしまったっていう。でも、絶対にこんなこと、Alice Nineはやらないだろうなって思うと思うんで、だったら、とことん聴く人を驚かせてやろうと思って。

Nao：やろうと思われてないどころか、自分でもこんな曲をやることになろうとは思ってなかったっていう（笑）。まさかの展開でしたよ。なので、驚きと楽しみと半々でしたよ。出来上がった今、３年後に、もう一度こういう曲をやってみたいですね（笑）。作り終わった今、既に自分の中に課題が見えてるっていう（笑）、それうらい、簡単に満足いく完成型は出来ないっていうくらいの大作ですね。既に、今、リベンジしたい。

それは後ろ向きな言葉ではなく、向上心としてね。

Nao：そうそう。後ろ向きな発言なら、もうこんな曲二度とやりたくないって言うと思うから（笑）。もっと経験積んで、こういう曲をやれたら、もっといいモノになるんだろうなって思うんですよね。

若いバンドには出来ないよね。

Nao：一応、若い……つもりなんですけど、ダメですか？

いいですよ（笑）。でも、まさに、プログレッシブ・ロックだよね。

虎：あははは。また調べたんだ（笑）。

ヒロト：あははは。またWikipedia情報（笑）？

虎：そう（笑）。プログレッシブ・ロックとは。【プログレッシブとは本来、先進的、前衛的という意味だが、プログレッシブ・ロック・バンドのアルバムや楽曲は、●大作主義傾向にある長時間の曲、●歌が短く演奏重視で、インストゥルメンタルの楽曲、●技巧的で

複雑に構成された楽曲、●芸術性を重視した曲作り、●シンセサイザーやメロトロンといった、当時の最新テクノロジーを使用した楽曲作り、●変拍子などの多用】だそうだね。

ヒロト：ほとんどが当て嵌まってるっていう（笑）。でも、唯一違うのは、メロディーはちゃんとあるってことかなと。

そうだね。３曲に同じメロディーが存在してるしね。

沙我：俺らはプログレバンドではないので、とことんマニアックになりたい訳ではないし。そこはちゃんと意識して作ったつもりですね。っていうか、まず、俺、プログレッシブ・ロックって知らなかったですからね。

虎：俺も、プログレッシブ・ロックを知らずに、プログレやっちゃったって感じで。ジャンル的にはロックなんだけど、まったくロックの中でも触れてこなかった世界だから、俺の中では、HIP HOP やるうような感覚だったんですよね。でも、バンドとしてやっていることだから、すごく勉強になったというか。今回やってみて、プログレッシブ・ロックってこういうもんなんだって知れた感覚だったんですけど、いままでは、プログレッシブ･ロックって、すごく難しいイメージがあったんです。最初から、１２分の大作を作るって目の前に出されたら、たぶん出来てなかったと思うんですよ。でも、徐々に伸びていった感じだったんで、自然に自分の体の中に入ってきたって感じだったんですよね。

ヒロト：僕的にも、きっと１２分っていう曲が最初から目の前にあったら、抵抗がなかった訳はないと思うんですよね。でも、本当に、今、虎氏が言ったように、自然と出来ていったって感じだったから、そこまでの抵抗を感じなかった。

沙我：１２分の曲を出されて、抵抗がない方がおかしいもんね（笑）。

Nao：本当に、さりげなく、さりげなく伸びていった曲だったからね（笑）。レコーディングしながら曲が作り上げられていってた感じでしたね。そこも新しかったですよ。岡野さんも、夜中の３時に沙我くんに電話するくらいですからね（笑）。ホントに気合入ってましたから（笑）。メンバー間でも、何度も何度も話合って、“ここはこうしてった方が良くない？”とか、“こここうしてみよっか！”とかって言い合いながら作っていったんで、作業的にもすごく楽し

んで出来たんですよね。煮詰まることなく。

なるほどね。でも、この曲の中にも、ちゃんとアルバムのテーマとなった二面性を感じるよね。将くんの歌うメロが１つのGEMINIで、楽器隊が前面に押出される間奏部分が、もう１つのGEMINI。これは、この曲だけに限らず、今回、どの曲の中にも感じるよね。

将：それは言えると思いますね。

沙我：たしかに。そこは意識していた部分だったと思いますね。

「GEMINI-O」のろっく感と間奏のクリアなアルペジオから賛美歌的な世界へと繋がる対極さは、すごく美しいよね。

「GEMINI-I」へと流れるとこでは、またロック感が全開になるっていう、抑揚がたまらなく胸にくる。

ヒロト：個人的には、そんなに長さを感じないというか。「GEMINI-O」と「GEMINI-Ⅱ」のサビは結構前から沙我くんに聴かせてもらってて、何度聴いてもすごく良かったんですよ。それがあったからこそ、間にいろいろと入ってくる流れを長いと感じさせないというか。あのサビがなく、たちたちとただ長く曲を続けていたら、すごく退屈な曲になっていたよ思うし、わざわざここまで長くする必要性も感じないし。すべては、サビにあると思いますね、この曲は。

そうだね。個人的に、「GEMINI-Ⅱ」の長め間奏もすごく好きだったんだよね。

沙我：きっと、聴く人それぞれが、好きな部分を見つけてもらえる曲になってるんじゃないかな。

将くん。歌詞は大変だったんじゃない？

将：楽曲自体のスケールが大きかったんで、歌詞のテーマも大きくなったというか。でも、感じてもらったように、この曲の中には、生と死っていう表裏一体の世界が存在するんです。生に絶望していても、最期だったり、死を意識することによって、現実が光り輝いて感じることが出来るという。今という時を大切に生きていこうっていうことを唄っているんです。

なるほど。コーラスのファルセットとか、すごく印象的だったな。すごく音と歌詞に自分を沈めて聴けたというか。

将：歌うときも、演劇のような感覚で歌ったんです。演じるような感覚で。綺麗に歌えばいいだけの曲ではないから、ワンシーンごとを、大切に演じていくイメージで歌っていったんで、聴いてくれる人にも、演劇を見ているような感覚で、

受けとめてもらえたら嬉しいなと思いますね。

そうだね。虎が言ったように、プログレッシブ・ロック＝難しい曲というようなイメージは取り払ったところで、自然に受けとめて欲しいよね。

虎：ですね。１２分だし、間違いなく大作ではあると思うけど、ちゃんと意味のある１２分という長さだから、自然に聴いてもらえると思いますね。

Nao：しかし、ライヴでやることを考えると、ちょっとまだ想像つかないとね（笑）。もうちょっと練習を重ねてから、ライヴでは披露したいですね。

たしかに。ライヴでやるとなると、体力のいる曲ではあるからね（笑）。そして、ラストの「birth in the death」。この曲も、すごくラストっていう印象の強い１曲だったけど。この曲はラストを意識して、ここに置かれた曲だったの？

沙我：ですね。この曲は最後に置くしか置き場がないだろうっていう曲でしたね。この曲が真ん中あたりにあったら、もう次の曲、誰も聴きたくなくなっちゃうんじゃないかって思いますからね（笑）。それくらいラストが似合う曲だと思います。この曲は、また、とことんAlice Nineらしくないことをやろうと思って作った曲なんです。「GEMINI-O」から「GEMINI-Ⅱ」まで、これ以上なくドラマティックな楽曲の次に、すごく無感情な曲調を、敢えて持ってきてやろうと思って。

まさに、対極。

沙我：そうなんですよ。「GEMNI-O」～「GEMINI-Ⅱ」みたいな曲をやったバンドが、「birth in the death」みたいな楽曲は絶対作らないと思うんですよ。そこを敢えて並べて置くっていう。そこの面白さも考えて、この曲をラストに置いたんです。

この曲も、オープニングナンバーである「I.」と同じく、そこまでバンドサウンドにこだわったモノではないように思うけど。

沙我：ですね。Naoさんなんて、頭何分かは居ないですからね（笑）。ライヴでやるときはどうしようかと思って（笑）。

ヒロト：曲の途中でふらっと登場して、自然に叩き出すっていうのでも、いいんじゃないかな。それ、絶対カッコイイを思うんだけどな。

Nao：いいよ、それ。すごいカッコイイと思う。それでいこうよ！

虎：じゃぁそれで（笑）。っていうか、この曲、何気に難しいんですよ。ギターも、そんなに難しいことやってる訳ではないんだけど、ずっと単調なフレーズがループしてて難しいんです。テンションを高くして頑張る曲じゃないっていうか。ずっと同じアルペジオをひき続けているんで、弾いてる最中に、自分がどこをどうやって弾いているのか、解らなくなってきちゃうよいうか。

沙我：ずっとアルペジオ弾いてるからね。

ヒロト：たしかに。でも、個人的に、この曲は今回のアルバム曲の中で、デ段階から、一番やりたい！って思った曲でしたね。自分の体の周波数と合うんですよ。体が求める曲というか。

Nao：おっ。体が求めちゃう感じ（何故か喜ぶ）？

ヒロト：そう。そこ重要だよね。

将：そこ重要です。

沙我：重要です。

虎：ですね（笑）。

沙我：あと、この曲、衝撃の事実が！なんと、俺、ベース弾いてないです。この曲のベース、打込みなんですよ。元かそうじようと思っていた訳じゃなく、レコーディングでは生で弾いたんですけど、結果、要らないかなってことになって、打込みにみにしちゃったんです。だから……ライヴでどうしましょうね。

ライブでは弾いたらいいんじゃない（笑）。

ヒロト：それか、Nao さんなんかするとかね（笑）。

将：沙我くんと Nao さんは、この曲をライヴでやってるとき、生で映像に出演してくれるってのはどう？

ヒロト：いいね。２人に、パフォーマンスで、【生と死】を演じてもらうようにしよっか（笑）。

そんなことされたた、曲に入り込めなくかっちゃうよ（笑）。歌詞も深いもんね。

将：そうですね。歌詞は暗めですね。サラッと語れない感じの内容ですね。「GEMINI-O」～「GEMINI-Ⅱ」もそうなんですけど、深く語り出したら、パーソナル・インタビューでも足りないくりになっちゃうんで。流れ星のように瞬いて消えていくっていう、人の人生を客観的に見てる自分っていう。ずっと歌い続けてきた、一番自分が言いたいことが集約された歌詞でもありますね。このアルバムの曲たちをライヴで聴いたら、また、音源で聴いたときの印象を違うを思うので、早くライヴでやりた

いですね。そこで、またはっきりとその先がみえてくるんだと思います。

沙我：今は、自分たち的にも、そんな新しい自分たちを知っていける瞬間が楽しかったりもするので、このアルバムももちろん、今後のAlice Nineに期待してもらえたらなと思いますね。